

令和七年度

前期 日程

国語問題 (H・F・J・E)

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答用紙の受験番号欄(計六か所)に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き合計十七ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。
- 四、解答用冊子には解答用紙三枚と白紙一枚が一緒に折り込まれている。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 六、問題冊子の下書き欄及び余白は、適宜下書きに使用してよい。
- 七、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 八、問題冊子及び白紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問い(問一～問四)に答えなさい。

山形県鶴岡市にある加茂水族館は日本で唯一のクラゲをメインにした水族館であり、世界最大数のクラゲの展示がそれまでの経営不振を払拭する大きな起点となった。クラゲのアイスクリームから、クラゲのヒーリングDVDの販売も行われている。そのブームにつづくように、今では日本各地の水族館で、沢山の種類のクラゲを展示、ライトアップし、その幻想性と非日常性、清涼さが演出されている。このクラゲの流行のなかで私たちは何を経験しているのだろうか。

水の流れに逆らうのでも、抗^{あらが}うのでもない。水の動きに合わせて傘をゆっくり膨らませ、萎^{しぼ}ませ、また広げる。たとえ水流で攪^{かくはん}乱されても、浮力と傘を萎ませることによる上方への推力で再度バランスは回復する。そのリズムミカルな拍動に、火花のような激しさや強さを読み取ることは難しい。巨大な水槽のなかで無数のミズクラゲが、完全にシンクロすることなく、微細なズレを含む揺れとなつて明滅のサインをやさしく発するさまは、日常の卑小さを忘れさせてくれる。奪われるのは心だけではない。見ている側の身体も、虚空に浮かぶクラゲのリズムに浸されていく。暗闇でほのかに光る彼らを見ていると、足元から身体が遠心状にゆっくり揺れ動いたり、頭部が上下したりもする。その心地よさが自律神経系に変化を及ぼすといった、いささかあやしめの科学的効果も喧^{けんでん}伝されている。

イソギンチャクやサンゴと同様に「刺胞動物門」に属するクラゲ類は、「鉢虫綱」、「箱虫綱」、「ヒドロ虫綱」、「十文字クラゲ綱」の四つに分かれる。日本には諸説あるが二〇〇～四〇〇種ほどいるようだ。もちろん泳ぐことはできるが、基本は水流にのつて漂っている。だから水の流れのない環境で飼育したり、むりやり泳がせつづけようすると疲れて沈んでしまふか、死んでしまふ。水にゆられ、水に成り切っているのが彼らの基本スタイルである。

神経系は身体全体に網目状に張り巡らされているが、哺乳類とは異なり、中枢が存在しない散在神経系といわれる。それは、四肢や内臓を欠いた「脳」だけで浮遊しているようなものだ。哲学の思考実験で有名な「水槽の中の脳」^(注1)は、クラゲのアナロジーとして十分成立する。

クラゲの傘の真ん中辺りにある胃腔^{いこう}では海水が取り入れられ、消化された栄養分は水管という血管のような管が蠕動^{ぜんどう}することで運ばれるが、そのさい閉閉する傘の拍動がポンプのように体内全域に酸素や栄養分等が行きわたるのを助けている。その意味では脳にとどまらず、水中で呼吸する心臓のようでもある。あるいは、英語でクラゲは sea-lungs ともいわれるが、その名の通り「海の肺」だ。

特定機能をもつ器官が配置されているのではない。それら器官が幾重にも重ね合わせられるようにして(口と肛門も一緒である)一個の生命となつている。ひとつ拍動することが、同時に「移動」であり、「呼吸」であり、「摂餌」であり、「栄養供給」であり、「排泄^{はいせつ}」である。クラゲは哲学者のドゥルーズが主題化した「器官なき身体^(注2)」と形容してもあながち遠からずの「生ける水」であり、約九五%が実際に水分なのだから「水という生命」に最も近い存在である。

水に身体の一部を溶かしつつ、水との差異を厳密に維持して絡み合う存在としてのクラゲを、このように記述するとき、私たちはどこか根源的な生命の秘密に触れているような陶酔感を受け取る。そんな仕方でも「生きる」ことが成立している事実⁽¹⁾に、私たちの経験の境界が揺さぶられる。

しかし気をつけておこう。人間であることや哺乳動物であることの肉の臭みや、凡庸さから極めて遠い存在としてクラゲを祭り上げ、そこに神秘さと儂^{はかな}さ、弱さを見出してしまふとすれば、それは観察する側の欲望の投影にすぎない。そのような方⁽²⁾向への記述の誘導はいつでも起こりうることだ。

鑑賞するポジションから現れるクラゲは、どこまでいっても観察対象として美しく描かれてしまう。もつといえは、私たちが生きていること、生活し、働き、食べ、社交し、セックスし、排泄することとは接点のないものとして外化され、美化される。私たちとクラゲは、水とクラゲのように離接してさえない^(注3)。

実際、水槽という人工的環境とは異なる場所で、クラゲの現実に触れてみようとするれば、やわらかな神秘さは異形なる様相を示し始める。彼らには匂いもあるし、ざらついた手触りもある。食べる場合でも何段階もの加工プロセスを介在させなければ臭くて食べられない。人間にとって致死的な猛毒を触手に溜め込んでいる種も多い。

生きた個体たちには強烈な個性があるのに、そうしたことは水槽における視覚的現実からは閉め出されてしまう。これを①と評してもいいが、クラゲにとってそれはどうでもいいことだろう。

毒だけではない。世界各地でクラゲの大量発生が社会問題化している。ある報告によれば日本近海では傘の大きさ二メートル、体重二〇〇キロ近い個体も存在するエチゼンクラゲが、一九〇〇年代には一〇〜四〇年周期で、二〇〇二年から二〇〇九年までは毎年、大量に発生していた。ミスクラゲやアカクラゲも大量発生し、日本各地で火力発電所の冷却水を取り入れる取水口に押し寄せ、発電をストップせざるをえない事態が引き起こされている。

そもそもクラゲの生活史には、サンゴやイソギンチャクのように地面に固着し、無性生殖で増殖する「ポリプの世代」と、水中に浮遊して有性生殖を行う「クラゲの世代」がある。私たちが目にするクラゲは、ほとんどがクラゲ世代である。対してポリプは一ミリにも満たない小さい姿であることから、野外での発見は遅れ、研究の歴史もまだ若い。しかし、クラゲの経験に接近するにはこのポリプの生活史から始めねばならない。というのも、このポリプこそ大量のクラゲを発生させるクラゲの母体(水母の母)だからである。

たとえばミスクラゲのポリプは、無性生殖によって増えながらコロニー(群体)を作っている。一個体は約一カ月で七〇個体が増え、個体密度が高まれば、同じ遺伝子をもつ個体のいない隙間へと放射状に広がっていく。つまり、彼らはお互いの位置を把握しながら、かつ、別コロニーのポリプとの明確な識別を行うことができる。このポリプから「ストロピラ」^(注4)への変態を経て海に放出されるクラゲたちは、遊泳能力に優れているわけではない。それでも同種で集群を作ることができる。クラゲが海面を埋め尽くすのも、この集群化によってである。

集群する大量のクラゲ類は、小さな動物プランクトンだけではなく、稚魚や魚卵も捕食している。その意味では、大型魚を頂点とする食物連鎖とは別に、「動物プランクトン→小魚→クラゲ」というクラゲを頂点とする「食物連鎖」のルートも想定可能であり、その場合、同じ獲物を捕獲する「頂点捕食者」同士の競合が、魚類とクラゲ類の間で起こりうる。にもかかわらず、これまで海洋生態系におけるプランクトンの物質循環モデルにクラゲが登場することはほとんどなかった。

最近になって「海洋生態系には魚類またはクラゲ類を最上位とする二つの食物網が存在する」ことを明確に提唱する研究者も現れ、⁽²⁾「現在のようない人間活動が続くと、前者の食物網から後者の生産性の低い食物網にシフトすると懸念」されてもいる。確かに、クラゲを捕食している魚類も数多くいるし、マンボウにもクラゲを専門に食べる種もいる。しかし、彼らによる捕食がクラゲの大量発生をトップダウン的にコントロールできるものなのかどうかは、今もって不明のままのようだ。

そもそも世界の海では、大量の魚類が捕獲され、マンボウも絶滅危惧種リストに入っている。また大型の貨物船が世界中を移動するさい、船を安定させるためにその海域の海水を数万トン規模で大量に取り込むが、そのなかにクラゲが混入すれば、別の海域に容易に運ばれてしまう。魚の養殖によって海が富栄養化することもクラゲにとっては増殖のチャンスである。さらにコンクリートやプラントの柱など海底に設置された人工構造物や、廃棄されたプラスチックゴミにも、ポリブは付着でき、そこでクラゲが増殖していることも分かっている。

こうした事態を見ていると、現在はもしかするとクラゲにとって天国のような海洋環境が実現しつつあるようにも思えてくる。もしクラゲを捕食する魚類等が人間によって食べ尽くされてしまえば、クラゲが完全なる頂点捕食者となる。「大量発生が起こっている海域では、クラゲが食物連鎖の行き詰まりになってしまつて、長い食物連鎖がからみあつて、多種多様な生き物が棲む海ではなく、クラゲだらけの海になってしまう恐れ」がある。

クラゲ類は生物進化のかなり早い段階から存在している。五億年はゆうに生き延びていて、カンブリア紀以前から存在していたのでもともと囁かれて^{ささやか}いる。生物種として見た場合のクラゲの「強韌さ・タフネス」は、二〇万年程度の実績しかない人類とは比べ物にならない。

脊索という軸を身体にもつ動物は、魚類や爬虫類、哺乳類等へと進化の歩を進めた。ホモ・サピエンスも当然この系列の最前線にいる。しかしクラゲは、こうした系列とは全く独立の進化の淘汰を経て、今も最前線にいる。先史人類学者のルロア・グーランが「終わりなき競争の勝者」として、「クラゲと人間」を併置していたのも、それゆえにである。

東京の押上にある「すみだ水族館」には、夥しい数のミズクラゲが漂う長径七メートルに及ぶ楕円の水盤型水槽がある。鑑

賞者はその上に立って、足元に広がる無数のクラゲの遊泳を鑑賞できるのだが、四方八方をクラゲに取り囲まれているその体感、華やかながらも空恐ろしくもある。というのもその感触は、世界の海で起きている現実を、つまり私たち人間のほうが、いつのまにかクラゲの強かさに取り囲まれ、追いつまれてしまう未来を暗示しているだけでなく、その実現に積極的に加担しているのが、巨大水槽というテクノロジーの粋を極めた装置の上からクラゲを眺める自分たちであることにも気づかされてしまうからである。

たとえば大型の魚類がいなくなっても、人間が絶滅しても、クラゲたちは生き残るだろう。私^(イ)たちは、クラゲだけが存在する海へとシフトする、そんな可能性の境界線上で初めてクラゲと離接する。

(稲垣論「くぐり抜け」の哲学』講談社、二〇二四年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

(注1) 「水槽の中の脳」 「あなたの見ている『現実』は、実は培養液で満たされた水槽の中で電気回路につながれた脳が見ている幻覚かもしれない」という思考実験。

(注2) 「器官なき身体」 各器官へと機能分化していない身体。

(注3) 離接 [英]disjunction ここでは「AまたはB」という形で、選択肢として併置可能な関係となっていることを意味する。

(注4) ストロピラ 横分体。ポリプが縦に長く伸び、横にくびれが入った状態になり、そのくびれの一つ一つが皿状になったもの。その後、皿状のストロピラが一枚ずつはがれ、クラゲの幼生となる。

(注5) 食物網 食物連鎖と同義。生態系における食物連鎖は、もともと被食者―捕食者関係の一つ一つの鎖環を指すが、この関係のつながり全体を指す場合には「食物網」を使う。

問一 ①に入る語句として、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「やわらかな神秘さ」

イ 「隠された美しさ」

ウ 「演出された弱さ」

エ 「拍動する強かさ」

問二 傍線部(1)について、「私たちの経験の境界が揺さぶられる」とはどのようなことを意味するかを、本文の内容に即して一二〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(2)の「現在のような人間活動が続くと、前者の食物網から後者の生産性の低い食物網にシフトする」とは具体的にどのようなことかを、本文の内容に即して一六〇字以内で説明しなさい。

問四 傍線部(ア)と傍線部(イ)について、筆者が傍線部(ア)で「私たちとクラゲは(中略)離接してさえない」としている理由と、傍線部(イ)で「私たちは(中略)クラゲと離接する」としている理由を、本文の内容に即してそれぞれ六〇字以内で説明しなさい。

II

次の文章は、『所有とは何か——ヒト・社会・資本主義の根源』に収録された「手放すことで自己を打ち立てる——タンザニアのインフォーマル経済における所有・贈与・人格」の冒頭部分である。これを読んで、後の問い(問一、問四)に答えなさい。

「循環型社会」「シェアリング経済」「持たない暮らし」。日本社会で目にするこれらの用語には、ICT(情報通信技術)などの利用を通じて不用品を交換したり、遊休資産へのアクセスを可能にしたり、特定のモノへのオープンアクセスを実現することで、限られた資源を有効活用するとともに、資本主義経済の進展で失われた「つながり」やコミュニティを再興する意図が込められている。本章では、⁽¹⁾こうした議論が基盤とする「個人と個人のあいだのモノの融通・共有」とそれによる「持たない暮らし」とは異なる世界観で成り立っている、東アフリカに位置するタンザニア社会の「持たない暮らし」を提示したい。

欧米諸国や日本の人びとが捨てた不用品は、タンザニアを含む発展途上国に輸出され、SDGsが叫ばれるよりもはるか以前から、モノの寿命限界までリユースやリサイクルされてきた。タンザニアでは現在でも、中古車や中古家電、古着など中古品が人びとの消費生活において重要なウェイトを占めている。タンザニアの消費者が購入した中古品は、彼らの隣人や友人、故郷の親族へ贈られたり、生活に^(a)コンキウして転売されたり、金銭を借りる担保にされたりする。贈られた中古品がさらに別の誰かに贈られたり、担保として友人に預けたモノが買い戻されたりもする。誰かがひとたび所有したモノが贈与や転売を通じて別の誰かの所有物となる。それが何度も繰り返されることで、モノは「私のもの」「誰かのもの」「さらに別の誰かのもの」「ふたたび私のもの」などと変化を遂げながら、社会の中で循環してきたのだ。

こうした循環が起きるのは、ある面では新品の商品を購入する能力が不足しているからであり、豊かな者から貧しい者へと富が分配されることを是とする社会規範があるからである。またある面では、手に入れた財を転売したり投資したりしながら、「自転車^(b)ソウギョウ的」に営むインフォーマル経済がひろく展開しているからである。

いずれの場合でも重要なのは、「私のもの」が「他の誰かのもの」に変化する際、そのモノは、それを一時所有した「私」から切

り離された無色透明の「モノ」になるわけではないことである。

人類学者のアルジュン・アパデュライは論集『モノの社会生活 The Social Life of Things』(一九八六)において、モノの価値は、使用価値だけでなく、モノの社会的履歴に伴って変化する交換価値によっても決まることを論じた。私たちの身近な例で説明すると、わかりやすいだろう。たとえば、ある骨董品店(こつどう)で売られている万年筆は、すでに書くという行為には使えないとしよう。だが文豪に使用されていたという万年筆の社会的履歴によって、そのモノは非常に高価なものになっている。もし、その万年筆の履歴に恋人から文豪へ贈られたというロマンスが発見されれば、その価値はより高くなるだろうし、万年筆を購入した富豪が次々と不審な死を遂げたという履歴が明らかになれば、呪われた万年筆としてその価値は下がるだろう。

同じことは、文豪やセレブリティによる所有に限らずに生じる。論集に寄稿したイゴール・コピトフが述べる通り、車などの日用品から美術品(c)、ドレイなどのヒトを含め、多くのモノや財は「個人化・人格化 individualization」と「商品化」を行き来している。それぞれの文化的な履歴には、そのモノにまつわるさまざまな関係性が埋め込まれている。そして、ひとたび誰かのものとされたモノが再び商品化されるとき、そのモノは、そのモノの履歴に関する人びとのアイデンティティを帯びることもあるのだ。

元の所有者や関係者のアイデンティティがモノに付帯するという考え方は、人類学ではとりわけモノが贈与される場面において強調されてきた。そのような議論の端緒は、マルセル・モースの『贈与論』におけるマオリの贈り物の霊「ハウ」をめぐる謎だ。よく知られている通り、モースは、贈り物に返礼が起きるのは、贈り物にとり憑いた霊「ハウ」が、元の持ち主のもとに戻りたいと望むからであるとするマオリのインフォーマント(情報提供者)、タマティ・ラナイピリの説明にこだわった。モースは彼の説明を手がかりに、マオリの法体系において、モノを介して形成される紐帯(ちゆうたい)は「魂と魂との紐帯」であり、「何かを誰かに贈るといふことは、自分自身の何ものかを贈ることになる」と論じた。なぜならモノには元の持ち主、贈り手の魂が宿り、元の持ち主は贈り物を介して受け手に影響力を発揮しているからである。

ハウをめぐるモースの議論はさまざまに再検討がなされ、いまだハウとは何かをめぐる議論が続くが、贈り物に持ち主

の人格が宿っていること自体は、私たちにも経験的に理解できることである。

たとえば、日本では、恋人からもらった手編みのマフラーを誰か別の人に贈ったり売ったりすることは忌避されがちだ。それは、そのマフラーにマフラーを編んだ恋人の思い、すなわち魂が込められているように感じられるからだろう。恋人がデパートで選んだ商品でさえ、そこに「彼／彼女らしさ」、すなわち贈り手の人格が憑いていると感じ、不要になつても捨てるのを躊躇する人は多いだろう。別れた恋人の贈り物を捨てるという行為が、そのモノとの関係だけでなく、そのモノを媒介にして恋人へのシユウチャクと決別するという儀式になるのも、モノが元の持ち主のアイデンティティやその持ち主と受け手が共有する何がしかを帯びていると考えるからだろう。

こうした贈り物に与え手の人格の一部が宿っているとといったヒトとモノとの分離不可能な関係を論じてきた人類学は、「個人」が所有物に対して排他的な権利を有するという、個人の「身体Ⅱ労働」を基盤とする私的所有論の考え方に対して異議を提示してきた。

モノの社会的履歴、そしてモノに付帯して循環する持ち主たちの人格は、所有(私的所有)と他者への贈与や分配を対立するものとみなす議論に再考を促す。すなわち、法的な権利とはべつに、贈り物をエージェントにして受け手に働きかけ続ける元の所有者は、その贈り物の所有権を放棄したと言えるのだろうか。そのモノはいまだ持ち主に帰属しているのではないか。「譲渡不可能」な贈り物とはいかなるもので、それはいかにモノとヒトとの関係を取り結んでいるか。これらの問いは必然的に、さまざまな角度から「自己」とは何かをめぐる問いも喚起してきた。

たしかに松村圭一郎がエチオピアの農村社会を事例に論じた通り、タンザニアのインフォーマル経済従事者のあいだでも共同(集団)所有か私的(個人)所有か、あるいは所有権が認められているか否かといった慣習的、法的なルールだけでなく、何をどこまで他者に分け与えたり、他者と共有したりするか、いかにして譲り渡すのを回避するかをめぐるミクロな攻防がモノの所有をめぐる大きな関心であることは間違いない。実際、タンザニアのインフォーマル経済従事者は金銭や動産、不動産として所持しているモノは少ないものの、それらのモノや財を金銭的価値に換算したり、それらを排他的に使用したり、他者に自

由に販売したり担保にしたりする「所有権」を十全に理解している。だが、明らかに自身に所有権がある場合でも、「譲ってくれ」「共有させてくれ」という要請を心情的あるいは社会道徳的に断ることができず、モノや財を手放すことは多々ある。⁽³⁾そうした事態は、「私的所有の失敗」のように見える。

しかし、先述したように、元の所有者がモノを媒介として財を譲り受けた者たちに働きかけていることを前提とすると、私的所有に失敗することを「損失」とみなし、贈与や分配を「利他的な行為」であるのみならず必然性はどこにもない。そのような所有と贈与を対置させる見方は、身体のなかに閉じ込められた自己、自己と身体との同一視を前提とした考え方に過ぎない。

本章では、タンザニアのインフォーマル経済従事者を事例に、彼らが財の所有権等を第三者に譲り渡していくことで、社会関係を維持するだけでなく、経済実践を成り立たせ、さらに他とは区別された自己を確立していく論理を検討する。それを通じて人間と所有物を分離可能とする所有論とは異なる所有の想像力のひとつのあり方を提示する。

(小川さやか「手放すことで自己を打ち立てる——タンザニアのインフォーマル経済における所有・贈与・人格」岸政彦・梶谷懐(編)『所有とは何か——ヒト・社会・資本主義の根源』中央公論新社、二〇二三年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

問一 傍線部(a)と(d)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)について、欧米諸国や日本の「持たない暮らし」とタンザニアの「持たない暮らし」はどのように異なるのか、本文の内容に即して一八〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(2)における「無色透明の「モノ」になる」とは、どのような考え方に基づいているのか、本文中の表現を用いて五〇字程度で説明しなさい。

問四 傍線部(3)における「私的所有の失敗」のように見える「事態のタンザニア社会における意義について、筆者はどのように考えているのか、本文の内容に即して二八〇字以内で説明しなさい。

III

次の文章は、本居宣長『玉勝間』の一節で、『伊勢物語』に、真名(漢字)のみで書かれた「真名本」というものがあることについて、それを、通常の「仮名本」(平仮名を主体として漢字も混じる表記で書かれている本)と比較して、その時代性などを考証している文章である。これを読んで、後の問い(問一〜問五)に答えなさい。

伊勢物語に、真名本といふ本あり。^(注1)万葉の書きざまにならひて、真名して書きたる物なり。^(注2)六条宮御撰と、はじめにあげた

れば、その親王の御しわざかと見もてゆけば、あらぬ偽りにて、後の物なり。まづすべての字のあてさま、いとつたなくして、しどけなく正しからず、心得ぬことのみぞ多かる。そが中に、「闇う」を「苦勞」、「指之血」を「及後」などやうにかける

は、戯れ書きにて万葉にもさるたぐひあり。また「東」を「熱間」、「云々にけり」を「逃利」など書けるも、清濁こそたがへれ、な

ほ許さるべきを、「なん」といふ辞に「何」の字を用ひ、「ぞ」に「社」、「と」に「諾」の字を用ひたるたぐひ、いと心得ず。しかのみ

ならず、「思へる」を「思恵流」、「給へ」を「給江」、また「ここへ」かしこへなどの「へ」をもみな「江」とかき、「身をも」、「これ

をや」などの「をも」を「や」といふ辞を、「面」「親」と書き、「忘」を「者摺」と書けるなど、これらの仮名は、今の世とても、歌よ

むほどのものなどは、をさをさ誤ることなきをだに、かく誤れるは、むげに物かくやうをもわきまへしらぬ、えせものものしわざと見えて、真名はすべてとりがたきものなり。然はあれども、詞は、よのつねの仮名本とくらべて考ふるに、たがひによき

あしきところ有りて、仮名本のあしきに、この本のよきも、すくなくならず。そを思へば、これもむかしの一つの本なりしを、

後に真名には書きなしたるにぞ有るべき。されば今も、一本にはそなふべきものなり。然るにいと心得ぬことは、

わが県居の大人の、この物語を解かれたるには、よのつねの仮名本をば、今本といひて、ひたぶるにわろしとして、この真

名本をしも、古本といひて、こちたくほめて、ことごとくよろしとして用ひ、ともすればこのつたなき真名を、物の證にさへ

引かれたるは、いかなることにかあらん。さばかりいにしへの仮名の事を、つねにいなるにも似ず、この本の、さばかり仮

名のいたくみだれて、よにつたなきなども、いかに見られけむ、かへすがへすこころえぬことぞかし。

さてまたちかきころ、ある人の出せる、旧本といふなる真名の本も一つ有り、それはかのもととは、こよなくまさりて、大かた今の京(注6)になりての世の人の、およびがたき真名の書きざまなる所多し。さればこれもまことのふるき本にはあらず、やがて出せる人の、みづからのしわざにぞ有ける。しかいふ故は、まづ今の京(注7)となりての書かみどもは、すべて仮名の清濁は、をさをさ差別なく用ひたるを、この本は、ことごとく清濁を分けて、みだりならず。(4)こは近く古学てふこと始まりて後の人ならでは、さはえあらぬことなり。また、「かきつばたといふ五言を、句の頭にすゑて」とかける、これむかし人ならば、「五もじ」とこそいふべきを「五言」といひ、「歌のかへし」を「和歌」(かへし)、「滝」を「多芸」(たぎ)、「十一日」を「十麻里比止日」と書けるたぐひ、ただ今の世の古学する者の古語によれるにて、よろしくはあれども、このものがたり出来てのころの文のさまにあらず、時代(ときよ)のしなを思ひはからざるしわざなり。「十一日」など、此の物語かけるころとなりては、「十一日」とこそ書くべけれ、たとひなごめてかくとも、「とをかあまりひとひ」とこそ書くべけれ、それを「あまり」の「あ」をはぶけるは、古学者のしわざ、また「とをか」の「か」をいはざるは、さすがにいにしへのいひざまをしらざるなり。また、うつ山のくだりに(5)、よのつねの本には、「修行者あひたり」とあるを、この本には「修行者仁逢有」と、「仁」(に)てふ辞をそへたるなども、いにしへの雅言(みやびこと)の例をしらぬ、今の世の俗意(よつてい)のさかしらなり。かかるひがことも、をりをりまじれるにて、いよいよいひつはりはほころびたるをや。

『玉勝間』による

(注1) 万葉の書きざま 万葉集の表記。

(注2) 六条宮 具平親王。平安時代中期の人。

(注3) 戯れ書き 万葉集に見える表記法の一つで、「戯書」と称される言語遊戯的なもの。「憎く」を「二八十二」(二・九九)と表記するなどがある。

(注4) 「なん」といふ辞 「辞」は付属語のことで、助詞・助動詞から成る「なむ」を指す。

(注5) わが県居の大人 賀茂真淵。江戸時代の国学者。この文の筆者である本居宣長は、真淵を「古学」の師と見ている。

(注6) 今の京 平安京。

(注7) 今の京となりての書ども 奈良時代に用いられていた万葉仮名では、「波」は「婆」など、清音と濁音とを書き分けていたが、平安時代になって、平仮名・片仮名で書かれるのが普通になると、一般的には清濁が書き分けられなくなつた。

問一 傍線部(1)について、

(ア) 現代語訳しなさい。「かく」の指す内容は示さなくてよい。

(イ) ここで「誤れる」と評されているものは、「仮名」のどのような誤りであるのか。「をも」「をや」といふ辞を、「面」「親」と書き、「忘」を「者摺」と書ける」を例として説明しなさい。

問二 傍線部(2)を現代語訳しなさい。代名詞の指す内容は示さなくてよい。「二つの本」もそのままよい。

問三 傍線部(3)「かへすがへすころえぬいどぞかし」について、どのようなことが「ころえぬいど」とあると言っているのか、簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部(4)を現代語訳しなさい。代名詞については、冒頭の「こ」の指す内容を示すこと。

問五 傍線部(5)は、伊勢物語の「よのつねの本」の東下りの段に、「宇津の山にいたりて(中略)、すずろなる目を見ると思ひしに、修行者あひたり」とある箇所への言及である。「この本」の「仁」は本来の本にあったものではなく、「この本」の方が「よのつねの本」に対して「修行者仁逢有」と、「仁」てふ辞をそへたと、筆者は判断している。筆者がそう判断した理由を、本文の趣旨に沿って説明しなさい。